

## ④-7 教員向け意識調査

実施日：令和4年12月 実施対象：本校教員（回答：42人）

### A-1 関心の向上

		とても思う	わりと思う	あまり 思わない	ほとんど 思わない	元々関心をもっている	向上率	前年度
科学的な分野への関心に対する関心が高まった	全体	8	25	6	0	3	84.6%	70.7%
	数・理	4	6	4	0	3	71.4%	80.0%
	その他	4	19	2	0	0	92.0%	65.4%
海外の人々との活動など、国際性に対する関心が高まった	全体	6	25	10	0	1	75.6%	64.3%
	英語	4	4	1	0	0	88.9%	71.4%
	その他	2	21	9	0	1	71.9%	62.9%
SDGs に対する関心が高まった	全体	11	22	7	1	1	80.5%	77.3%
探究活動の支援に対する関心が高まった	全体	16	19	7	0	0	83.3%	86.4%
情報活用に対する関心が高まった	全体	9	26	7	0	0	83.3%	69.8%
大学や企業などの研究に対する関心が高まった	全体	12	22	7	0	1	82.9%	73.8%
	数・理	3	10	3	0	1	77.8%	82.4%
	その他	9	12	4	0	0	84.0%	68.0%

向上率は「元々関心をもっている」を除いた人数のうち「とても思う」「わりと思う」と回答した割合（%）

### A-2 授業への取組の向上：次に示す授業を行うようになりましたか？

	全体（「以前から行っている」を含む）				全体（「以前から行っている」を除く）					
	日常的	各単元	年に数回	なし	日常的	各単元	年に数回	なし	各単元以上	前年度
発表を行う	5	12	17	5	5	10	13	3	48.4%	28.6%
自身の考え方を示したり、事柄・現象の理由を考えて述べたりする	21	12	5	1	14	11	4	1	83.3%	69.0%
諸問題を提示して、原因を見ついたり解決策を考えたりする	8	17	12	3	5	13	12	2	56.3%	36.0%
他者と意見を交換して、新しい考え方を得ることができる	19	17	2	2	10	16	2	1	89.7%	71.0%
学習活動にて、情報機器を活用させる	9	17	10	4	8	14	6	4	68.8%	52.9%
教科の学習を SDGs と関連付けて行う	1	13	16	11	1	12	14	7	38.2%	31.8%

### A-3～A-5 探究活動の向上、通常授業への反映

項目	とても 思う	わりと 思う	あまり 思わない	ほとんど 思わない	肯定率	前年度	
A-3 探究活動における生徒への支援の仕方が身についた	7	30	5	0	88.1%	53.3%	
A-3 探究活動の授業の進め方が身についた	8	24	10	0	76.2%	56.8%	
A-3 探究活動の評価の仕方が身についた	1	23	17	1	57.1%	45.5%	
A-3 探究活動にて自身の専門性を生かすことができている	4	24	12	2	66.7%	39.5%	
A-4 教科横断的な学習で開発した授業実践は、通常の授業に生かしていると思いますか。	6	23	12	1	69.0%	29.5%	
A-5 生徒の国際性に通じる授業実践は、通常の授業にて行っていますか。	全体	3	15	10	14	42.9%	27.3%
	英語	3	5	1	0	88.9%	87.5%
	英語以外	0	10	9	14	30.3%	13.9%

肯定率は合計のうち「とても思う」「わりと思う」が占める割合

### A-6 研究開発の生徒への効果：「○○（研究開発の項目）」は生徒の成長につながっていると思いますか。

研究開発の項目	とても 思う	わりと 思う	あまり 思わない	ほとんど 思わない	わからない	肯定率	前年度
Meraki の探究活動	14	24	4	0	0	90.5%	88.4%
教科横断（SDGs の視点を踏まえた授業）	5	23	13	0	1	68.3%	81.4%
教科横断（論理的思考・プログラミング的思考）	7	18	15	0	2	62.5%	76.7%
国際性（3年生のポスターセッション）	11	27	2	0	2	95.0%	79.1%
国際性（2年生の英語によるコミュニケーション）	9	20	6	0	7	82.9%	70.7%
国際性（1年生のプログラム）	10	19	2	0	11	93.5%	
〔昨年度3月〕国際性（1年生のプログラム）	5	21	3	0	13		89.7%
海外の高校生との共同研究	8	19	2	0	13	93.1%	69.0%
メラーボプロジェクト	12	20	0	1	9	97.0%	73.8%
TAMA SSH セミナー student	8	20	1	1	12	93.3%	85.7%

肯定率は、「わからない」を除いた合計人数のうち、「とても思う」「わりと思う」が占める割合

A-7 研究開発の機会・業務への取組状況

年間の SSH に取り組む機会について、どのように感じますか。

	R4		R3	
	拡大 SSH	以外	拡大 SSH	以外
十分行われている	7	9	9	10
わりと行われている	6	19	5	19
やや足りないと感じる	1	0	0	1
ほとんど足りないと感じる	0	0	0	0

SSH に関わる教育活動（準備や実施）は、  
日常の業務としてどのぐらい行っていると感じますか。

	R4		R3	
	拡大 SSH	以外	拡大 SSH	以外
教科・部活動・学年のうち 複数の業務と同等以上	2	0	1	1
教科・部活動・学年のうち 1つの業務と同等以上	8	13	10	9
教科・部活動・学年の業務 と同等以上ではない。	4	15	3	21

A-8～13 成果の発信の検証

A-8 情熱メラーク

	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
毎回の発行に目を通して いる	10	5	13	16
年に数回、目を通すこと がある	7	17	4	11
ほとんど目を通したことが ない	0	3	0	1

A-9 SSH のホームページ（本校のホームページ）

	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
頻繁にみている（毎月1回以上）	2	0	3	0
何回かみている（年間3回以上）	7	11	10	7
見たことがある（年間1・2回）	6	13	4	19
見たことがない	1	1	1	0

A-10 SSH 研究開発実施報告書

	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
全体的に読み込んだ	5	2	4	0
部分的に読み込んだ	7	5	10	4
およそ書かれていることを 確認する程度に目を通した	3	10	2	9
目にとまったところだけ 目を通した	2	5	1	11
ほとんど目を通さなかった	0	3	0	4

A-11 SSH コーナー（図書室前の掲示物）

	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
関心のあるものについて 詳しく内容確かめたことがある	9	9	8	11
関心のあるものについて 目にとまったことがある	6	15	8	15
目にとまったことはなく、 ほぼ素通りしている	2	1	1	2

A-12 ポスター配架

	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
詳しく内容を 確かめたことがある	7	5	3	1
関心のあるものに対して、 目にとまったことがある	8	15	9	18
目にとまったことはなく、 ほぼ素通りしている	2	5	5	9

A-13 SSH に関する図書

R3	R4		R3	
	拡大+経験	以外	拡大+経験	以外
生徒に読むことを勧める場面が 年に何回もあった	7	5	4	5
生徒に読むことを勧める場面が 年に1回だけあった	7	5	6	7
生徒に読むことを勧める場面は なかった	3	15	6	16

A-14 メラーキラボの教員による活用状況：メラークラボについて、どのように関わりましたか（複数回答可）

	R4				R3			
	全体	Meraki 担当者	SSH 推進会議	以外	全体	Meraki 担当者	SSH 推進会議	以外
	N=42	N=28	N=10	N=10	N=46	N=26	N=10	N=17
生徒の活動について指導や助言を行った	15	12	6	2	12	9	7	3
生徒に連絡を行うために使用した	4	3	2	1	3	3	3	0
生徒のポスターなど、印刷のために使用した	18	13	6	4	17	14	9	3
資料を読みに来た	10	7	5	2	9	6	5	2
授業で使うファイルなどを取りに来た	5	4	2	1	10	9	5	2
物品を借りに来た	24	15	9	6	20	13	10	6
使用したことがない	5	2	0	2	14	2	0	9

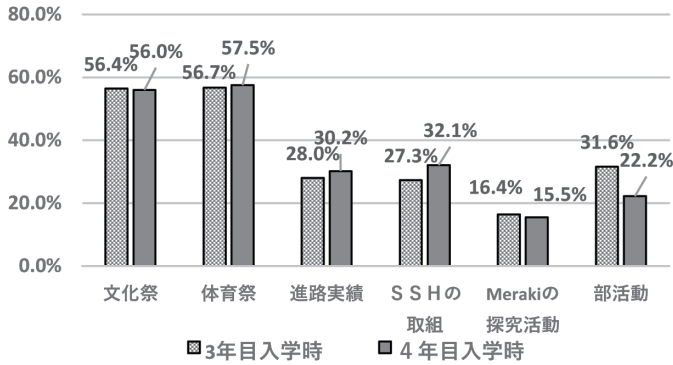
回答人数：令和4年度 全体42人、数学・理科17人、英語9人、SSH推進会議10人（拡大SSH推進会議14人、経験者含む17人）

令和3年度（前年度） 全体46人、数学・理科15人、英語7人、SSH推進会議10人（拡大SSH推進会議14人、経験者含む17人）

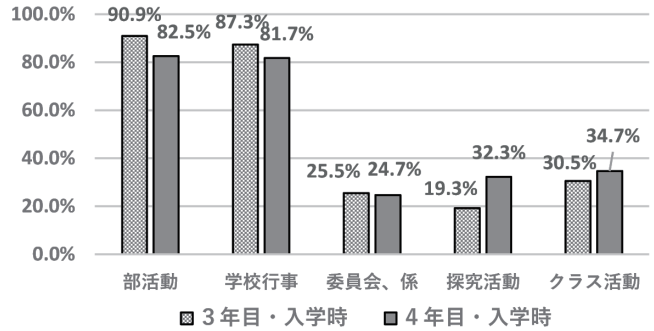
④-8 生徒向け意識調査

入学時調査

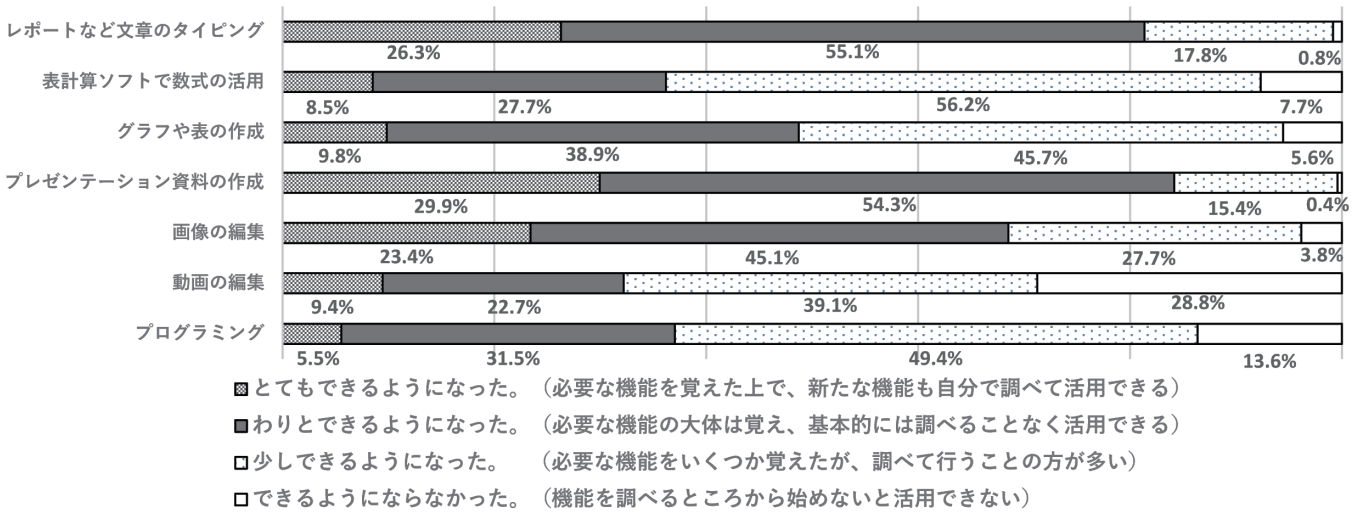
B-1 入学するまでに魅力を感じたことは？



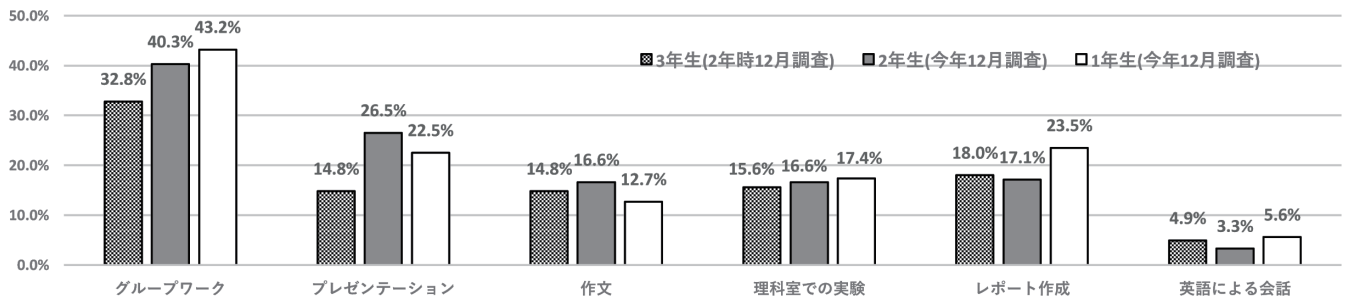
B-2 本校で頑張って取り組みたいことは？



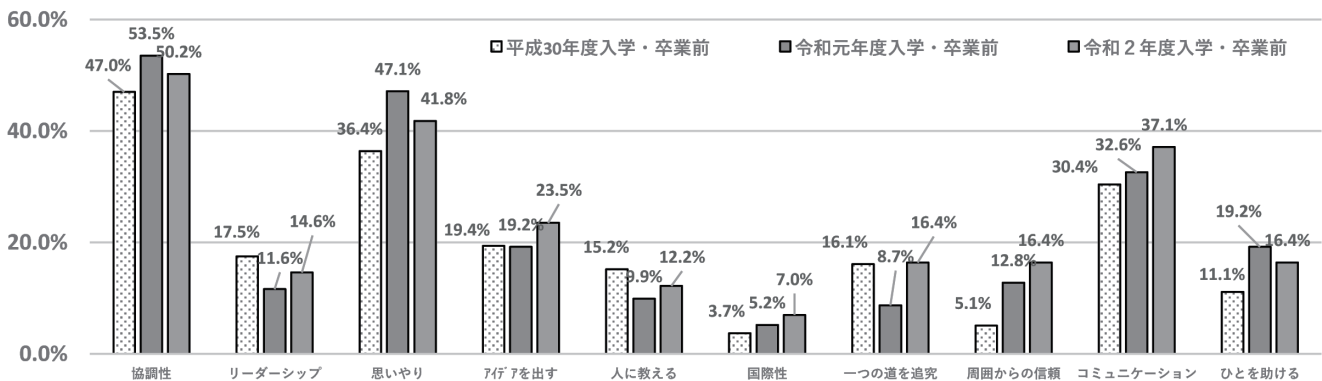
在校時調査 B-3 PCを用いた活動は身に付いたか？（1年生・12月）



B-4 得意と感じている学習活動は？（各学年）

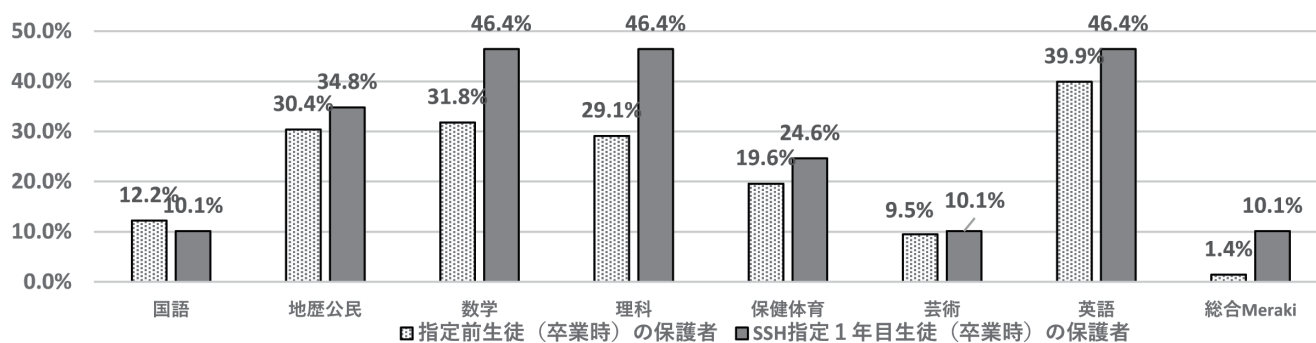


卒業時調査 B-5 自身を表すキーワードは？（3年生継続・卒業前）

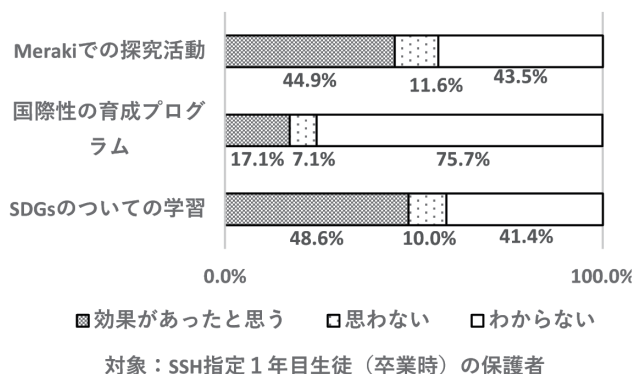


④-9 保護者向け調査

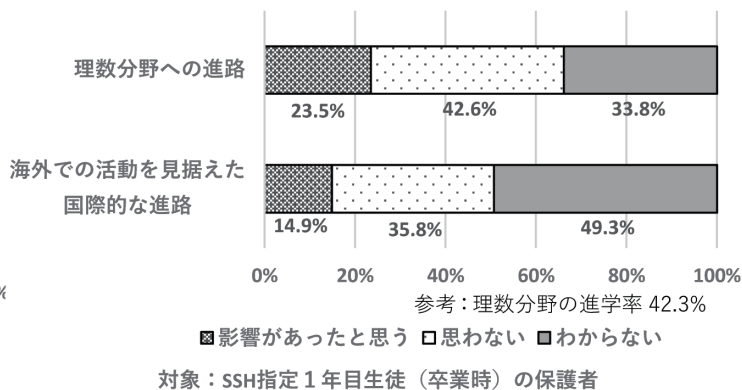
C-1 お子様はどの教科に関心を持っているようでしたか。



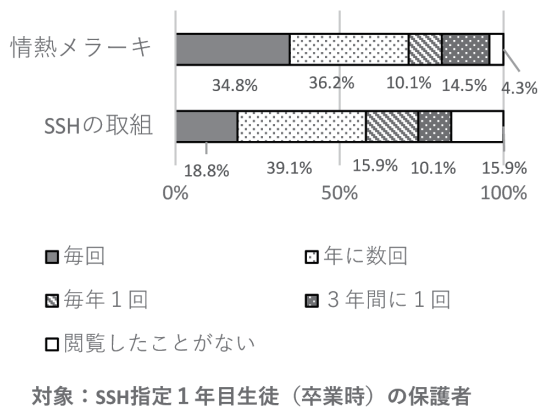
C-2 次の取組はお子様への学習効果があったと思いますか。



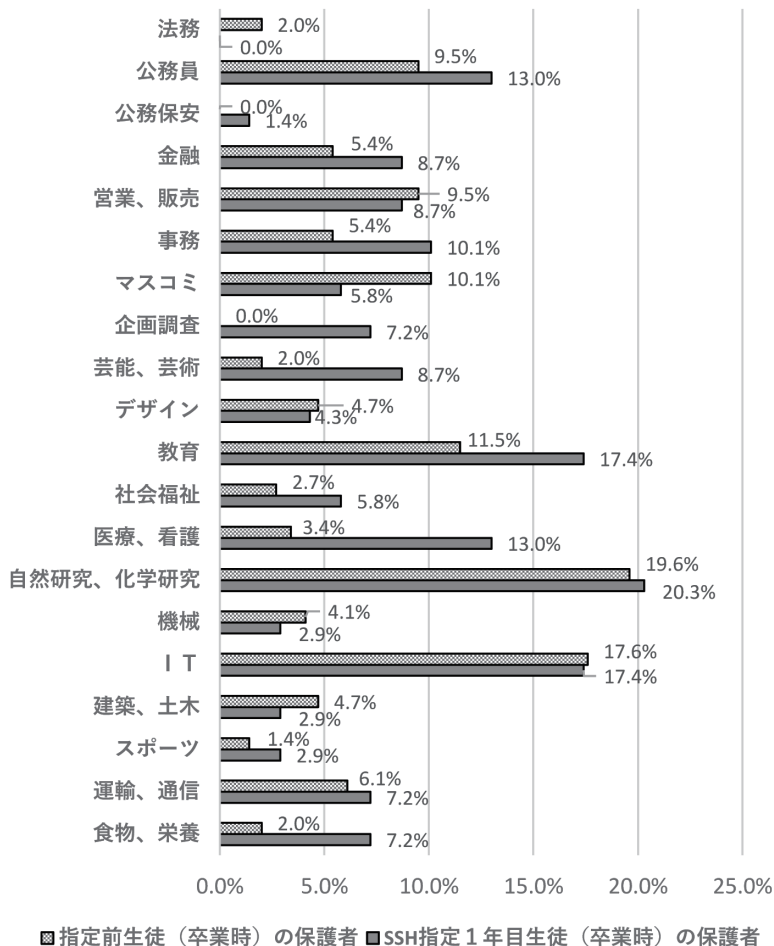
C-3 SSHの取組は次の進路選択に影響がありましたか。



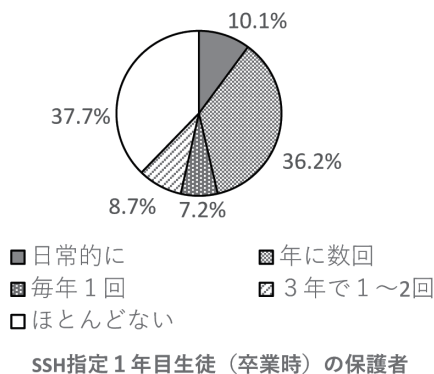
C-4 次の配信をどの程度ご覧になりましたか。



C-6 お子様は将来どのような分野で活躍することを期待していますか。



C-5 SSHに関する話題提供はどの程度ありましたか。



## 令和3年度 第2回奈川県立多摩高等学校SSH運営指導委員会 議事録

日時：令和4年3月18日（金）15:00～16:30

場所：多摩高等学校 会議室

出席者：

運営指導委員

棚村 光太郎 委員（早稲田大学理工学術院先進理工学部応用化学科教授）

桑田 孝泰 委員（東海大学理学部情報理学科教授）

相澤 哲哉 委員（明治大学理工学部機械情報工学科教授）

横川 慎二 委員（電気通信大学 i-パワードエネルギー・システム研究センター教授）

栗原 英俊 委員（富士通株式会社プロジェクトディレクター）

奈川県教育委員会高校教育課

石塚 悟史（指導主事）、秋月 和宏（指導主事）

多摩高校

野田麻由美（校長）、平沼宏仁（副校長）、浅井祐一（教頭）、石山克美（事務長）、巽直彦（総括教諭）、

石原徳子（総括教諭）、清水幹治（総括教諭）、栗原精一（総括教諭）、後藤博行（総括教諭）、重田寿夫（教諭）、

大竹保幹（教諭）、立川公子（教諭）、小林大起（教諭）、坂口大介（教諭）、柴田和範（教諭）、

仲山可那子（教諭）、田中大希（教諭）、村本晶子（SSH 事務）

校長挨拶：

- ・中間評価の結果を受け止め、高度な理数系の課題研究の指導や、国際性の活動について単発に見える点の2点について、改善に努めていきたい。
- ・理数系選択の生徒が増えたことや、理数系学部への進学実績の向上については、成果と考えている。
- ・令和4年度からは先進的な取り組みを進めるために、SSH 部を立ち上げて、高度な理数系の課題研究の支援をさらに進める。国際性については、台湾との交流を行い、継続的な共同研究につなげていく。

研究協議：

- 令和3年度の取り組み及び令和4年度の計画について説明し、以下のような質疑応答、指導・助言を行った。

▶横川 委員

- ・本日の発表では、グラフや平均値の記載はあるが、標準偏差が記載されていなかった。そういったことについて取り組むだけでも勉強になる。一人一台端末の環境が実現すると、データサイエンスについてレクチャーしてほしい。パソコンの先にあるインフラを有効に活用してほしい。

- ・学校によってはエネルギーが不足している状況が見受けられ、GIGAスクールで全員がPCを充電しようとするブレーカーが落ちることもある。端末の管理に関しては、あらかじめ条件を提示するべきである。

▶桑田 委員

- ・様々な研究テーマがあるが、3年連続で数学をテーマにした研究が出てこないことは、疑問を感じた。

- 担当：他校の取組を紹介することはしている。また、数学を行っていないか？

- 担当：前半の部分できっかけづくりを行っている。また、数学を使った研究は少しずつ出てきている。来年はMeraki I の前半の部分できっかけづくりを行いたいと考えている。

- ・研究のきっかけを与えることと、掘りどころ、すなわち基礎学力が大切。掘りどころは数学オリンピック等の取組みで、土台は育成されているなど感じた。きっかけを与えることにに関しては、着眼点を提示したり、きっかけの押し売りみたいなのも必要である。

▶相澤 委員

- ・中間評価で「高度な理数系の課題研究の指導」という文言が2回出てきていることに關しては、やはり言われたなという感じがした。ただし、評価にかかわらず、生徒がやがやを感じて取り組み、力をつけて卒業してくれるのが一番と考える。何を研究しようかと考えた時に、専門家の意見を求めることが研究のレベルアップにつながる。全員でなくともよい。意欲のある人物だけでも、最初のきっかけづくりとして専門家にアドバイザーを求めてほしい。運営指導委員、あるいは卒業生の一人として協力できる機会があればできる限り協力する。

▶栗原 委員

- ・Q1：評価に關しては、教員だけでなく生徒も行っているのか？

→担当：生徒も行っている。

- 栗原委員：半年ほど研究して一定規準に達しなければ、軌道修正したりやめたりするための規準も必要。単に実験結果やプレゼンの良し悪しで判断するのではなく、中身の部分で評価することも大切である。

Q2：文部科学省は理数系の進学者の数を増やしているのか？

→担当：SSHの趣旨に基づいて、理数系の進学は科学技術人材の育成に通じていると考えられる。

Q3：大学入学試験における総合型選抜とはどのような制度か？

- 校長：以前のAO入試や自己推薦入試である。学力だけでなく、高校で取り組んだことや研究したことなどをPRしていく入試方式である。そのため、SSHの研究で取り組んだことをPRして評価されて、入試結果につながった例が、本年度はみられた。

Q4：多摩高校として人材育成の方向性はあるのか？

- 校長：SSHとして、科学人材の育成やグローバル人材の育成という方向性はあるが、多摩高校としては伝統的にバランスのよい人材育成、全人的な人材育成を重視してきた。そのため、理数系や国際性だけでなく、様々な体験をさせて、生徒を伸ばしていくと考えている。それをしながら、SSHとしての両輪の取組を軌道に乗せていけたらと考えている。

- 栗原委員：網羅的に何でも広く取り組むように聞かせる。公立高校だと特定の分野に注力しにくいのか？
- 校長：国が、先進的な人材育成に力を入れようとしている感じはある。一方で、神奈川県が行っているSSHは、全生徒に対して土台を固めていき、全員を引き上げていくとしている部分がある。そこに難しさを感じているが、探究的活動で取り組ませている科学・論理的な考え方は全ての生徒にとっても大切なものなので、SSHとして全生徒に取り組ませる一方、意欲的で先進的な取組みについても支援していく。

- また、他のSSHの状況を聞くと、2期～3期と回を重ねる学校ほど、先進的な取組よりも学校全体で沢山の生徒の土台を固める傾向がある。今後、本校の取組が主流になるのではないかと。
- Q5：国際性に関する取組は、組む相手にとってもメリットがあるか？
- 担当：事前に教員間で情報交換をし、相互にメリットがあると感じた。教員間の情報交換では、SDGs が共通の話題の取りかかりになりそうに感じた。

- ・パソコンを与えるだけでなく、それを活用するきっかけづくりを積極的に行ってほしい
- 担当：生徒にプログラミングソフトを使わせたところ反応はよかった。今後進めていきたい。
- ・オンラインの発表会では質問が出にくい。学会ではSLIDOというクラウドサービスを用いることがある。匿名で質問したり有用な質問に賛同したりする機能もある。そのようなツールを使うと、研究や発表に対するフィードバックが出てきやすい

▶村田 委員

- ・ループリックの活用がよくわからなかった。
- 担当：報告書48ページ参照。今年度は積極的に取り組んできた。1年生では9月頃から行っている。また、2年生でもイントロダクションの評価やSDGs Days 等で行った。3年については、計画はしていたが去年の一斉休校で予定が大幅にずれ込んだ関係でうまくやれなかった。今後は取り組めると思っている。

- ・（教育委員会に対して）最終報告書をまとめる際には、事前に運営指導委員にコメントを求めてほしい。委員のコメントをある程度反映したうえで提出版を作成できるよう、日程の余裕をもつことが重要ではないか。

## 令和4年度 第1回神奈川県立多摩高等学校SSH運営指導委員会 議事録

日時：令和4年10月28日（金）16:10～17:20

場所：多摩高等学校 会議室

出席者：

運営指導委員

桑田 孝泰 委員（東海大学理学部情報数理学科教授）

相澤 哲哉 委員（明治大学理工学部機械情報工学科教授）

横川 慎二 委員（電気通信大学 i-バワードエネルギー・システム研究センター教授）

栗原 英俊 委員（富士通株式会社プロジェクティブ・イニシアティブ）

神奈川県教育委員会 高校教育課

比良 剛（指導主事）、田中 秀樹（主任主事兼指導担当主事）

国立研究開発法人科学技術振興機構 理数学習推進部

利根川 太郎（主任専門員）

多摩高校

野田麻由美（校長）、平沼宏仁（副校長）、田中光男（教頭）、石山克美（事務長）、巽直彦（総括教諭）、

坂口大介（総括教諭）、清水幹治（総括教諭）、後藤博行（総括教諭）、石原徳子（総括教諭）、

角野文彦（総括教諭）、尾本哲明（教諭）、立川公子（教諭）、仲山可那子（教諭）、大竹保幹（教諭）、

田中大希（教諭）、山岸香奈恵（教諭）、村本晶子（SSH 事務）

校長挨拶：

4年目を迎え、今年度は特にI期の取組のまとめと、II期の申請を念頭に取組んできました。中間評価の指摘を受けて特に、研究の質を上げる、先端を伸ばす、専門機関や専門家とさらに連携しその力を活用する、国際性育成プログラムについて単発ではなく継続的なものにする、ことにフォーカスしてきました。本日委員の皆さまにMeraki Iで研究のスタート部分にご助言をいただいたことも、その一つとして新たに始めたものであります。

SSHの事業は最初から完成形ではなく、創りあげていくものだと考えています。II期指定に向けて、ご指導ご助言いただきたい。

研究協議：

○令和4年度の取組及び計画について

・新学習指導要領でのMeraki Iは昨年度までと計画を変更した。前期は調査・実験の試行、レポート作成などの情報活用、論文講読を行った。後期は科学技術教室を実施した他、研究テーマを定め、Introductionを作成、発表を行う計画である。毎回の授業ごとに評価基準を作成し、担当教員に共有している。

・中間評価の内容を踏まえ、高度な理数系の課題研究の手立てとしてメラープロジェクトで新たに、放課後の探究活動取り入れ、天然酵母を用いた実験を始めた。7月には理化学研究所に訪問し、研究のアドバイスをいただいた。今後はMerakiの時間も含めて進めていく。メラーキラボは放課後の実験、全国大会出場班の実験により、現時点で昨年度よりも活動回数が増えている。今後は数学オリンピック、台湾との共同研究で使用予定である。

・国際性育成プログラムにおける取組について、令和3年12月から台湾新竹高級中学とのオンライン交流を始め、令和4年3月にはSDGsに関連したテーマ設定を行った。6月には自分たちのアクションプランを考え、共有した。令和5年1月に訪問を予定していたが、中止となった。今後は共同研究を1年生に引き継ぎ、オンラインで交流を続け令和6年1月に訪問予定である。

・Meraki IIでは2年生全員が研究のIntroductionを英語で発表した。講師の先生に英語の運用についてルーブリックによる評価をお願いした。来年の英語での研究のまとめに向けて、次につなげる活動であった。

・今後の課題として、高度な理数分野の研究に向けた外部との連携、海外との共同研究に向けて体制の整備、指定II期に向けてI期の検証と展望の3点を考えている。

○質疑応答

Q 高度な理数研究ができないと、指定II期には進めないのか。

A I期からII期は創成期とされており、I期の中間評価で受けた課題の一つとして高度な理数分野の課題研究の手立てに着手している。

○指導・助言

▶栗原委員

・生徒によって意識の違いがみられる。全体の底上げも大事だが、意識が高い子をより伸ばすような施策があるように。

→担当：メラープロジェクトや台湾との共同研究に取り組み始めている。より安定した活動を進めていきたい。

▶相澤委員

・地学部・生物部のポスターを見て、とてもよくできており、裏に指導している先生のパワーを感じた。

・最初につきかかけを与えて、レベルアップさせたい。今回の機会はスタート地点である。

・1年生と研究の相談をして、準備してきて資料の文献に国際ジャーナルの論文がひとつあったが、論文の要点だけを和訳したホームページを見たり止まりだった。非常に中身の濃い論文だったので、原文にはあたっていなかつた。原文を紹介したところ非常に興味を持っており、「やってみる」というスイッチが入った。研究のスタートでスイッチが入るから入らないかで雲泥の差がある。20分では話さきれないので、30分欲しい。また、継続的に話をする機会がほしい。今後も継続的に話す時間を増やさない、きっかけだけ与えて、ふらふらと終わってしまうかもしれない。

・3年生のポスターは素晴らしいと感じる。ローカル、丁寧なのはわかるが高度を目指すなら世界トップレベルを見てほしい。難しいが研究の最初に論文を英語で読んでみると変わってくる。

→担当：今回のMeraki Iでの研究の相談は生徒同士の情報交換の時間に配慮して20分で組んだが、今後は時間を増やし、継続して行うことを検討する。

▶横川委員

・何を目的に取り組んでいるかを先生がわかっている、それが生徒に伝わっているのかわかることができる資料がある。先生がどう工夫、努力をされているのかわかる。

・興味を持ったことを研究テーマにすることはよいが、社会課題との結びつきが重要。高いモチベーションにより、外部から見ても高度な研究であるとわかる。

・データをどう使って結論に結び付けるかのロジックも高度な研究のひとつである。

・研究のスタートについて、最初にカチッと決めてしまうと、うまくいかなかった時に「だめだ」と思ってしまう。型にはめず、少し結果が見えてから考えよう。

→担当：高度な理数研究について、全国大会の優秀な研究と比べ、実験の量や先輩から継承している点で違いがあると感じた。研究のスタートについてはご指摘の通り、カチッと決めず後から考え直すほうが落ち着くこともあるため、計画について検討する。

▶桑田委員

・高度な理数研究について、高度な知識ではなく、高校生の持つ基礎知識で十分であると思う。

・徐々に成長している。生物部地学部のポスターはこれからは本格的になってくるのかなと思えた。

・数学でも高度な研究ができるのではないかと。1年生と話し、この人たちならやってみようかと思えた。あらかじめ渡した資料をよく調べていた。1人でやらず、複数人で研究して欲しい。また学校に読んでほしい。

・国際性は指摘通り、一回だけという取組にみえた。共通のテーマを持って続けてほしい。

→担当：数学研究について大変興味を持って知ろうとする生徒や、台湾との共同研究について意欲的に行おうとする生徒など、SSHの取組に関心を持っている生徒が増えている。継続的な取組になるよう今後の計画を進めていく。

#### ④—11 開発教材・概要

科目・教材名	
Meraki テキスト 令和4年度より	
I	<b>【1】</b> 探究活動について考えてみよう <b>【2】</b> 探究活動を進める際に心得ておくこと <b>【3】</b> 問いとリサーチクエスションの立て方 <b>【4】</b> 研究テーマを見つけよう <b>【5】</b> 仮説を立てる <b>【6】</b> 調査・実験（1）～酵母の実験の計画～ <b>【7】</b> 調査・実験（2）～酵母の実験の方法～ <b>【8】</b> 調査・実験の実行 <b>【9】</b> 定量と定性（統計解析） <b>【10】</b> 結果の示し方 <b>【11】</b> 考察の仕方 <b>【12】</b> 結論と展望の仕方（SDGsの視点を含む） <b>【13】</b> レポートの書き方（PC作成の手順） <b>【14】</b> 論文講読と論文紹介 <b>【15】</b> 論文を読もう <b>【16】</b> 相関関係について考えよう <b>【17】</b> 質問紙法について学ぼう <b>【18】</b> 科学技術機器について調べよう <b>【19】</b> 研究テーマを決めていこう <b>【20】</b> 研究班をつくって、キーワードと問いを立てよう <b>【21】</b> 「問い」「先行研究の調査」「リサーチクエスション」 <b>【22】</b> Introductionの作成 <b>【23】</b> 研究倫理と引用の仕方 <b>【24】</b> 資料の整理について <b>【25】</b> 相互に評価しよう
Meraki II	ルーブリックに基づく相互評価シート [Introductionの作成] ルーブリックに基づく相互評価シート [プレゼンテーション・質疑応答]
Meraki III	論文作成に関する相互チェックシート

#### ④—12 用語集

（あ行）

**【SDGs Days】** … SDGsの視点を踏まえた教科横断的な学習、および外部を招いての特別プログラムを実施する期間のこと。  
令和4年度は9月20日（火）～10月3日（月）に実施。

（た行）

**【TAMA SSH セミナー】** … 探究活動の深化にあたり、探究活動に関連する各分野の研究や支援の方法など、幅広い世代に関心を高める「学びの土台づくり」の研究開発として設置。

- junior 小・中学生に探究活動への関心を高めることを目的とした講座。
- student 本校生徒が探究活動の各研究分野に関心をもつことを目的とした講座。
- teacher 本校教員が探究活動の支援に関心をもつことを目的とした講座。

（ま行）

**【Meraki】** … 読みは「メラーキ」。学校設定教科の名称。ギリシャ語で「情熱」の意味。

- I・II・III … 「Meraki」の各科目名称。Iは1年（2単位）、IIは2年（2単位）、IIIは3年（1単位）にて実施。

**【メラーキクラス】** … 学校設定教科「Meraki」にて、研究分野に基づくクラスの総称。

各メラーキクラスにこれまで付した名称として、スポーツ・健康・人文・社会・創作・芸術・テクノロジー・数理・物質・生命・エネルギー・地球がある。

**【メラーキラボ】** … 本校SSH研究室の名称。指定1年目に考案し、2年目より開設。

**【メラーボプロジェクト】** … 探究活動の深化にあたり、メラーキラボを活用して国際科学コンテストや研究発表会に参加する「先進的なチャレンジ」の研究開発の名称。

→ **【SSHメラーボプロジェクト部】** … 「先進的なチャレンジ」を一層推進していくため、放課後の活動に全生徒が参加でき、全職員が支援できる体制とした部活動の名称。

**【情熱メラーキ】** … 読みは「メラメラメラーキ」。本校SSH通信のこと。指定1年目の主対象生徒が発案。